

リベルテール

11月号



Libertaire VoL, V, No 59

無政府主義者の機関紙

昭和四十五年 九月 四日第三種郵便物認可
昭和四十九年十一月十五日発行第五十九号

リベルテール

定価一〇〇円(郵送料共)

リベルテール 一部 100円

Le Libertaire 毎月一回15日発行

1974年7月15日発行 VoL, V, No 12

編集兼発行者 三 浦 精 一

発行所 東京都練馬区大泉学園町2190

萩原晋太郎方

リベルテールの会

(振替東京133830番三浦精一)

目次

巻頭言	1
海外から	2
反政治―アナキズム	3
無政府社会の生活の悩み	4
野火	5
アナキズムのデフレ現象 (1)	8
下妻淳一	13
革命	19
―今日それはなにを意味するか？	
編集室	

巻頭言

『狂気の時代』

「もし人類が生き残り、後世の史家が二十世紀後半を論ずるとき」には、きっと『狂気の時代』と名づけるだろう、と『天声人語』（朝日新聞）に書いていたが、まさに私たちの生きている時代は、ほかに言い表わし方がない。世界中の人間を数十回も殺せる量の殺人兵器を抱え込んでいるときに、また、さまざまな化学物質が人間の身体を蝕みつつあるとき、なお多くの人びとの精神を支配しているのは、無知・痴愚・狂気・迷信・不寛容、あるいは金銭欲・支配欲・名誉欲であり、この状態が続くかぎり、人類が自分のつくり出したものによって破壊するのは必至のようだ。このことは、最近の日本での出来事を見ても痛感させられる。

「ラロック証言」によって日本への「核持ち込み」が再び確認されたとき、日本政府のとった態度は、非核三原則があるから大丈夫、米国政府を信頼している、と平気な顔をしてみせて、だませる人間だけはだましておこり、ということだった。また、金大中事件を恥知らずなやり方で「解決」した日韓両政府は、ますます政治的・経済的癒着を強めており、日本資本主義の利益を護る番

犬と成り下った朴政権は、民主主義を求める韓国の民衆の運動を弾圧し続けている。佐藤前首相と田中首相の破廉恥ぶりについては、ここに書くまでもない。考えただけでもヘドがでそうだ。また一方では、「物質的生活の生産様式」こそが「人間の意識」を決定する、と主張しているはずのマルクス主義者どうしが、「支配欲」にとりつかれて、醜い内ゲバを果てしなく続けている。

だが、私たちは、表面的な騒音にばかり気をとられていてはならないだろう。『狂気の時代』にあっても、人間の理性を信頼し、寛容と思いやりの精神をもって、なお人類の未来を切り開こうとしている人びとの運動がある。反軍・反基地の運動、反公害の運動、在日外国人の人権確立の運動、アジアの民衆と連帯する運動などがそれである。それはなお少数の人びとの運動であるが、この体制を打ち崩すための努力を確実に続けている。

「われわれは全く非ロマンチックに、全く現在に生きながら、われわれの歴史時代の反抗的な材料をもって真の共同社会を建設しなければならない」とは、ブーバーの言葉だが、現在私たちにとって最も緊要なことは、これらの民衆の運動の意義を正しく捉え、そして、その民衆の側に立つことである、と思う。

（江藤 敏和）

『海外から』

☆ダイレクトアクション紙が再開された。ハわれ等の目的と原則Vは言う。サンジカリスト労働者連合は、特権階級の育成と、人による人の収奪が不可能な自由社会の樹立を目ざしている。それ故SWFは自由共働に基いて土地・生産及びすべての生産手段と分配を共有し、労働者による管理を支持する。その社会では賃金制度、財政、金銭は廃止され、商品は利益によってではなく、人間の必要に応じて生産・分配されるものとする。

国家についてSWFは自由社会の確立にあて国家を利用しない。また内閣や国会での議席を求めない。目的は国家の廃絶であり、戦争と軍国主義に反対する。

階級闘争について労働者階級と支配階級の利害は背馳する。SWFは日常闘争により共有と労働者による管理の確立まで闘争を継続する。

直接行動労働者の直接行動と連帯によってのみ階級支配に対する闘争は勝利する。SWFは議会手続きまたそれに類する活動は階級共調の道へすすむ階級闘争から労働者を逸脱させるものとして拒否する。

組織自由・無階級社会の樹立のため労働者は組織化しなければならない。サンジカリストのユニオンによって

技術集団、普通の労働組合にとって代るのだ。SWFはこの目的にあて各工場、鉱山、事務所、造船所その他の仕事場で労働者委員会を設立し、全国的なサンジカ連合に発展させる。このサンジカは直接の階層管理の下におかれ、代表者はリコールに付される。

国際主義SWFは国際労働者協会のセクションとして国際労働者階級の連帯にむけ自立する。

▲記事の中からVサンジカリストの活動は労働者の責任と主導権に依る手段を擁護する：生産は労働なくして稼働しない。それ故労働者の最大の武器はストライキだ。

例えば順法闘争がある。会社・工場には死蔵された規則協定がある。これを活用するんだ。フランスの鉄道労働者は法律でストライキが禁止された時喜んだものだ。サンジカリストは順法者だから法に順う。ある規則では鉄橋にさしかかったら列車を止めよとある。よろしい。運転者は安全確認のため各鉄橋で停車し急行が急行でなくなった。IWW会員の闘争も興味深い。彼は鮭カン工場で働いていて、高品質のカンに低品質指示のラベルを、低品質のカンに高品質指示のラベルを貼り替えた。こうして味の良い鮭カンが労働街へ流れた。うづ巻きストライキというのは各課各部で時間差によってストをする。だから管理者はどこでどうなったのか判らない。また働

いている部門の人がストに入った人の賃金を補償する。

これはイタリアで成功し経営陣に損害を与えたものだ。

：われ等の意図は自由管理階級組織の確立であり、官僚の介入は許さない、こうして腐った制度に挑戦するのだ。

(R・M)

☆B・P・メノンが参画している世界教育連盟（以前は世界単大・総合大学連盟と言った）から勧誘の案内が届いた。セミナーは一九七五年一月六日（廿日）にボンベイを起点としてインド各地を巡回し現場訪問とレクチャから成っている。テーマは女性とインドにとっての教育とは何か。教育はどのように女性の地位に影響するか等である。インド巡回費用を含め二七五ドルプラス二五ドル。但し渡航費は自弁。

反政治ーアナキズム

尾 沢 常 雄

アナキズムは反政治なのだろうか。僕はアナキズムを反権威、反権力だとは思ふ。又非政治、非暴力、非社会でもあると思う。ともかく、僕はアナキズムは非何々だとして一般にいいえると思うが、反を頭に冠しては、反権威、反権力位ではないのかと思う。

僕はいばっている人や見栄っぱり、かっこうをつける人はどうも好きになれない。それはそれが事実でないからだと思う。事実でないことはウソだ。ウソなんてまっぴらだし、それが反権威、反権力だと僕は思う。

非「何々」というのは「何々でない」ということだと思ふ。それは非をつけることによって「何々」という概念を打ち破り、「何々」ということを拘泥の対象からつきはなせる言葉だと思ふ。非暴力といった時、今の世相を見るとなにか無「反応力」で無抵抗のような意味あいがあるから僕はあまり好きでないが、「暴力ではない」というだけの意味で戦闘力も不正をうつ力も非暴力という言葉とは別にある、と思ふ。

そこで、「アナキズムは反政治なのだろうか」ということになるのだが、反政治とは何だろう。

政治とは古代のまつりごとと連なるものだと思う。古代、人々は参加するもしないも自由に自然力の驚異の前に陶醉していた。これがまつりごとだと思ふ。まつりごととは自然と人との直接的関係、自然力の驚異に対する観応だった。それがいつか自然力の代弁者として、人々の自然力に対する観応の集中的表現として、二つの面から自然力と人々とを結ぶものとしてかなんげのようなものを出してしまった。特殊職業の発生と人口の増加という

分業を合理的ならしめる事態が今日の政治家につながっていると思う。

今日の意味で政治をとらえるのなら、政治は権力の発現形態としての一面をもっていることは否定できないと思う。しかし今日の政治がもはやまつりごとでないにしても、政治は合理性と他の何ものかに対する観応の集中的表現の代弁として存在性を失なわないと思う。

政治は、今日ではあってもなくてもいいもの、言いかえるなら「政治を非政治へ」とそして「政治の」権力の発現形態の一面としての政治「否定」こそ、アナキズムなのではあるまいか。

無政府社会の生活の悩み

多田 安和

生活とアナキズムが合致するのか、いつも僕たちは悩む。僕は戸籍にしろ学校にしろ、法律にしろ、そんなもの認めない、と言ったり思ったりしても戸籍にのせられ、義務教育を受け、なにかするとすぐ警察のお世話になってしまう。もうここでは認める、認めないでなく、なにか、一つの主権国の統治下において強制的に生活を規範づけられているようだ。

そしてもう一つ、生活とアナキズムを考える時、アナ

キズムは生活を規範づけることができるか、という問題があるように思う。アナキズムに立脚したら生活がその規範力によって制限されるというのはなにか矛盾のような気がするのだが、逆にアナキズムに立脚したらそんな生活はできないというのを規範とすると逆の規範がアナキズムに立脚した生活ということができるだろう。時々、そんなことをはしを動かしながら考えたり、釣をしていて考える。

そんなことを考えるとなにかなにもできなくなっている気がしてくるのだが、それをふりきって悪すらできるという弁解をしてまで、意図に立脚しているという弁解も用意してなのだが、その次の行為を実行してしまいう。なにか、もし将来、無政府社会というものができたら、アナキズムに立脚した生活をしなくてはならないのだろうか、と考えるとこんなことまで考えてしまう。

無政府社会では僕はどんな生活をするのだろうか。相互扶助というようなあいまいなこととした言葉ではなく、時々考えたとユウウツになってくる。

野 火

富士高放火犯デッチ上げ裁判粉碎集会の報告

昨年の都立富士高放火事件で、定時制生徒の集中見込捜査↓別件逮捕↑デッチ上げ自白強要によって起訴されている加納良昭さんの完全勝訴へ向けての集会が、加納君を守る会・デッチ上げを定時制差別として共有する定時制各校代表・支援団体等の二百名近い結集で開かれた。定高制への差別構造を定高制自身の手で粉碎していくという意志は集会の全参加者の魂深く極印されただろう。警察―司法一体の犯人デッチ上げに対する闘いが着々と組まれている現在「人が人を裁く」事が当然とされている機構を解体していく過程で私等はフレイムアップと闘う人々と連帯し、差別の無い社会へ一歩ずつ近づこうではありませんか。11月10日中野サンブラザ集会室

☆ ☆ ☆

立命館全共斗救援会からの緊急アピール

七〇年以降一段と進化した、先鋭化した人民の闘いを前にして崩壊寸前の日本国家は、過激派キャンペーンや刑法改悪策動に象徴される様でありとあらゆる権力機構・マスコミを使って、事あるごとに狂暴な弾圧を強化し続けています。この様な困難な状況のなかで、猶一層の強

固な闘いを個々の拠点で一貫して闘って来た私達に対して、国家警察は、又しても、事実無根の新たなフレイムアップを開始してきました。それは元立命館全共斗メンバーに対する個別訪問と称する恫喝を始めとし、8月12日の古屋・杉本両氏の旅券法―逮捕、及び9月14日牧田・堀口両氏の大塚―逮捕。更に10月6日には爆取法の適科に依る牧田・杉本両氏の再逮捕に続く。この一連の不当逮捕の意図はまさに、警察が、過去に自分達が解決する事の出来なかった公安調査局事件への何等根拠のないこじつけで両氏を犯人として当嵌め、そうする事によって立命闘争を担った主体への弾圧を意図し、牧田・杉本両氏が元立命館全共斗メンバーでなかったにも関わらず、あたかもその中心メンバーであったかの様なデタラメな報道をなし、あまつさえ、一〇月七日付毎日新聞は「同局へ赤軍派が造ったピースかん爆弾を投げこんだのは、元立命館大生、元大阪芸大生、等の犯行と断定して行方追及に乗り出した」等とそのフレイム・アップはますます許しがたいものとなってきています。これは単に元立命館全共斗に留まらず赤軍派（？）やアナキストグループ等とあらん限りの闘う人々をなすり付かず関連づけ全く関係のない人達の思想や生存そのものまで「権力への蜂起」として弾圧しようとする国家権力・

マスコミ一体となった末期的ファッショそのものです。私達は、これ等の一切の斗争破壊策動を決して許す訳にはいかないし、立命館斗争以降、断固として闘い続けた姿勢を永久不変のものとし、その為にも、更に予見される弾圧に対して糾弾し、これと明確に対決すると共に、この様な一連の不当弾圧を受けた諸氏に対して熱烈なる支援と救援を行おうとするものです。

連絡先 京都中央郵便局私書箱119号

京都救援連絡会議気付 立命館全共斗救援会

☆ ☆ ☆

警察権力の「爆弾犯人」づくりの実態をあばく10・26反弾圧集会

本誌十月号でも紹介した、十月二十六日の集会は、会場となった千駄谷区民会館大ホールを満員とし、座れない人達が立ったまま参加するほどで、権力による「爆取」フレイムアップに対する、大衆的な関心が高まってきていることを感じさせた。これには、「情況」の特集「虚構と作為」(七〇年代フレイムアップの構造)、あるいは「終末から」掲載の榎下君の手記、その手記に端を発した「週刊ポスト」誌上の、秦豊氏の榎下君へのインタビュー記事、十月二十日付の「朝日新聞」等、マスコミ

がようやく動きだしたことによるのでしょうが、権力による「過激派」キャンペーンにもかかわらず「爆弾」犯人」とされた人達と大衆との間が、けっして分断されてはおらず、逆に、権力に対して疑惑を持った多くの人々がいたのだということを示しています。「警視総監公告爆弾未遂」事件では被告団が総て結束し、反撃を開始しており、裁判所も何度か裁判長をかえざるをえないまでに追い込まれているし、「土田・日石」では、中村隆治君が事件当日に運転免許の学科試験を受けていたというアリバイがあることが立証され、また、石井ひろみさんもバイト先でアリバイが発見されている。これらフレイムアップは、国家権力による完全な人権侵害であり、大逆事件が明治の天皇制の強化に利用され、最近では、韓国における早川・太刀川さんを巻き込んだ「民青学連事件」のように、国家・権力のファッショ化に通じていく危険性があるのであって、人間の自由を守るためにも権力によるフレイムアップは許されないのだ。なお、清水君の上告斗争の経過が、「上告斗」によって報告された。連絡・支援は左記へ

「日石・土田」 渋谷区鷹谷町4の5 明泉マンション

現代史研究所気付

「警視総監公告」 東京都練馬区上石神井1の498

福富方

☆ ☆ ☆

連盟結成のための第二回共同合宿が十月中旬、東京において行われた。この合宿において種々のことが話しあわれ、それらのまとめが『準備会ニュース』として関東地区準備会、関西地方準備会がそれぞれ、一号、三号を発売した。

関東地区準備会の「ニュース」を見ると、共同合宿における一般的話し合い、了解事項が記され、第一回関東地区準備会議の招請を載せている。当会議は十一月十七日調布の電気通信大学に催されるもので、中心課題は「個々の無政府主義の結節点はどこにあるか?」。

共学読書会

初心の人々の読書会です

第二、第四日曜日午後一時より夕方迄

東京都大田区西蒲7の61の4

国電蒲田駅より徒歩3分

エンリコビル3F

(七三五)一二四六

エスベラント学習会

興味ある人は参加可

毎週水曜日午後六時より

場所は右記同所

アナキズム運動センターはかねて同所で開かれていましたが、諸般の事情のため発展的に解散したそうです。